

マートン文書の「知の社会史」上の意義

——マートン研究の今日的課題——

高 城 和 義*

- 一 はじめに
- 二 マートンの略歴
- 三 マートンの学問
 - 1 科学社会学
 - 2 「中範囲理論」
 - 3 多彩な「中範囲理論」の提示
- 四 マートン文書の「知の社会史」上の意義

一 はじめに

タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons, 1902-1979) とならんで、20 世紀アメリカ社会学、ひいては世界の社会学界を牽引してきたロバート・K・マートン (Robert K. Merton, 1910-2003) が亡くなってから、7 年余りの歳月が流れた。マートンの死後、膨大な未公刊の草稿・書簡等が遺された。昨年、これらマートン未公刊文書の整理がようやく終わり、コロンビア大学図書館で利用可能となった。本稿は、昨年夏と本年夏とに調査したこれらの文書の内容紹介である。そうすることによって、マートン文書の「知の社会史」上の意義を考察しようとするものである。

いかなる知であれ、知は時代状況や知的コミュニケーション・ネットワークのなかで形成される。筆者はパーソンズ研究のなかで、彼の社会理

* takagi@main.teikyo-u.ac.jp

論、より広く彼の思想的・知的展開過程が、ハーヴァード大学や学界の知的諸潮流と深く関連して、とりわけパーソンズの友人・知人・共同研究者らとの日常的なコミュニケーションのなかで形成されてきたことを、具体的に解明することの重要性に気づき、それを「知の社会史」の一環として描きだすことに努めてきた。

マーソンの理論形成過程を研究する場合にも、このような観点の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。むしろ「知の社会史」という視覚がなければ、理論形成過程を具体的に描きだすことは不可能であるといっても、過言ではない。パーソンズやマーソンのような書簡・講義ノートなどの未公刊資料が遺されている場合には、とくにそういうことができる。理論史研究はこんにち、未公刊資料の検討を不可欠としている時代に入っている。

本稿では、マーソン文書の「知の社会史」上の意義を解明するという観点から、未だ紹介されたことのないマーソン文書の概要を紹介し、学界の今後の研究の一助にしたいと思う。まずは、マーソンの略歴を簡単に紹介することから始めることにしよう。

二 マーソンの略歴

ロバート・K・マーソン Robert K. Merton は、1910年7月4日にペンシルヴェニア州のフィラデルフィアで、東欧系ユダヤ人の家庭の次男として生まれた。彼の本名は、メイヤー・シュコルニック Meyer R. Schkolnick であり、南フィラデルフィアのスラム地区で育った。彼は子どものころから、市立図書館で文学に親しむとともに、非常に器用な少年であつたらしく、しろうと離れた奇術師として、祭りのときや多くの施設を訪問して奇術を披露して収入を得つつ、成長した。彼はフランスの天才的な奇術師 Robert Houdin の名とアメリカの奇術師 Merlin の名を変形させて作りだした、Robert King Merton を舞台名として活動していたが、14歳のころ、ユダヤ系を想起させる姓を嫌ったのか、みずから舞台名を本名とすることに決断した。

ロバート・K・マートンという名がもともと舞台名であったことは、研究史上これまで知られていなかった。彼の長男 Robert C. Merton (1944) は、金融論と計量経済学を専攻し、1997年にノーベル経済学賞を受賞したが、マートンという姓は、彼の父が舞台名を本名としたことに起因するものであった。

マートンは、1927年、フィラデルフィアにあるテンプル大学 Temple University に、奨学金を得て入学する。ここでマートンは、社会学の手ほどきを受けたシンプソン George E. Simpson の研究助手として採用され、社会学の学習に励んだ。1931年、彼は大学卒業と同時にハーヴァード大学大学院社会学専攻に進学し、ソローキン Pitrim A. Sorokin やパーソンズ Talcott Parsons の指導の下で、社会学研究を推進した。のちにマートンが「パーソンズ退職記念晩餐会」の席上、「タルコット・パーソンズを発見したのは、われわれである」と誇らしげに語っていることに示されているように、マートンがパーソンズ学派の最も古い世代の一人となったのは、彼が自発的に選択した結果であった。

1934年、マートンはカーハート Suzanne Carhart と結婚し、さきに触れた息子と二人の娘に恵まれている。末娘のヴァネッサ Vanessa Merton は、ペイス大学 Pace University ロー・スクールの法学教授となっている。晩年になってマートンは、1993年、教え子であり共同研究者であった科学社会学のズッカーマン Harriet A. Zuckerman と再婚しており、本稿で紹介するマートン文書は、マートン没後に、ズッカーマンがコロンビア大学に寄贈したものである。

彼は大学院進学後4年目の1935年に、『17世紀イングランドの科学・技術・社会』と題する博士論文を提出する (Merton 1938)。この学位論文は、科学社会学という新たな社会学の領域を切り開くものとなった画期的な作品であり、ウェーバーのテーゼを下敷きとしつつ、17世紀のイングランドで近代科学が登場したのは、プロテスタンティズムがその思想的土壌となっていたことを、実証的に解明したものである。彼はこの業績を基礎として、同年、ハーヴァード大学社会学科講師として任用される。

マートンは1939年にルイジアナ州のテュレーン大学 Tulane Univ.に転じたのち、1941年、フランクフルト学派に属する社会調査の専門家ラザースフェルド Paul Lazarsfeld と同時に、コロンビア大学社会学科の助教授として任用され、1947年教授に昇任するとともに、コロンビア社会学のリーダーとして長らく活躍しつづけた。このマートン＝ラザースフェルドのコンビは、理論家と社会調査研究者との緊密なコンビとして、コロンビア応用社会調査研究所の中心となり、若手研究者をも組織しつつ、多彩な実証的研究を生みだしつづけた。ハーヴァード社会学のパーソンズ（理論）＝ストウファー（調査）・コンビと、しばしば対比されるゆえんである。パーソンズ＝ストウファー組と比較すると、マートン＝ラザースフェルド組のほうが、より実証主義的な傾向をもっている。パーソンズ自身そう理解していた。このことは、のちに紹介するマートンの弟子たちの傾向にも顕著にあらわれている。

マートンは1974年、コロンビア大学からユニヴァーシティ・プロフェッサーの栄誉を与えられ、1979年からは特別任用教授として、また名誉教授として遇され、1990年にはコロンビア大学にマートンの名を冠した教授職 R.K.Merton Professorship が設けられている。同時に彼は、アメリカ社会学会（1956-7）、東部社会学会（1968-9）、社会調査学会（1968）、科学の社会的研究学会（1975-6）など、多数の学会の会長を歴任するとともに、アメリカン・アカデミーのタルコット・パーソンズ賞を授与され、1997年には社会学者として初めて、国民科学メダル National Medal of Science を贈られている。もしノーベル社会学賞があれば、まちがいなくマートンが受賞者になったであろうと、なんにんもの研究者が指摘している。

彼は2003年2月23日に、92歳で生涯を閉じた。コロンビア大学は、モーニングサイド・キャンパスで大学葬をおこなっている。

三 マートンの学問

マートンは、著書11冊、編著11冊、論文166本、書評120を公刊したほか、31冊の書物に序文を寄せている。これらの業績についてまず注目

しておくべきことは、序文の多さである。マートン自身によれば、2000本以上の論文と200冊以上の本の編集を手がけたという。マートンは、彼の弟子たちのみならず、多くの研究者の仕事在完成させるために、多大な時間とエネルギーとを費やしつづけた。そのことを如実に示しているのが、60巻にのぼる科学社会学関係論文シリーズ (Merton *et al* eds. 1975) と、61巻の社会学関係学位論文シリーズ (Merton & Zuckerman eds. 1980) である。まさしくマートンは、アカデミック・オルガナイザーとして巨大な貢献をしたとみることができる。

マートンの多くの弟子たちのなかには、『TVA とグラス・ルーツ』 (Selznick 1949) で一躍高名となったセルズニック Philip Selznick、教育社会学者で実証主義的社会学理論を提唱したジェームズ・コールマン James Coleman、官僚制の研究者ピーター・ブラウ Peter Blau、多方面にわたる優れた業績を残したりプセット Seymour Martin Lipset、社会学理論研究のルイス・コーザー Lewis Coser (マートンのフェストシュリフトの編集者 Coser 1975)、ローズ・コーザー Rose Coser、アリス・ロッシ Alice Rossi、パーソンズ批判で高名となったアーヴィン・グールドナー Alvin W. Gouldner やデニス・ロング Dennis Wrong、科学社会学のズッカーマン Harriet A. Zuckerman などがふくまれている。

マートンは、これら多様な領域を研究している多数の若手研究者を指導し、彼らの論文や著書を公刊するために、編集作業をつづけてきた。こうしてマートンは、コロンビア社会学の黄金時代を築きあげた。同時にこのことは、マートンの学問自体、多彩なテーマに広がって展開されてきたことを物語っている。つぎにマートンの学問を概観してみよう。

1 科学社会学

まず第一にマートンは、彼の学位論文を嚆矢として、科学社会学という新たな研究領域を切り開いてきた。『17世紀イングランドの科学・技術・社会』 (Merton 1938) と題されたマートンの最初の著作は、ウェーバー・テーゼを実証的に展開したものであった。ウェーバーは、オランダの昆虫学者スワンメルダムの「余はここに一匹の虱しらみを解剖して諸君に神の摂理を

証拠立てよう」という言葉を引用して、プロテスタンティズム、とりわけピューリタニズムの信仰が、近代科学形成の思想的地盤となったことを示している（Weber 1919、40 頁）。マートンの作業は、このウェーバーのアイデアを 17 世紀イングランドに即して、数量的・実証的に解明したものである。

さらにマートンは、科学的発展とこれにたいする報酬構造との関係について、興味深い実証的研究を展開した。彼によれば、フランス・アカデミーの 40 名の終身会員は、非常に高い評価と榮譽を享受し、その評価は「歯止め」効果によって、生涯変わることがない。これにたいして、アカデミー会員と並ぶほどの業績を上げたものの、41 番目の地位におかれた研究者は、アカデミー会員とは比すべくもない低い地位にとどまっている。それは研究資金の配分や社会的地位の格差に結果している。この「予期せざる結果」は、優れた研究者の権威を保証し制度的に安定化させることに役立つとともに、ともすれば権威の偶像化をもたらし、学問の「普遍主義」的評価基準を犯すことにつながっている。

マートンはこのような科学的報酬構造を、非常に巧みに「マタイ効果」と命名している。「それ誰^{たれ}にても、も^も有^{ひと}てる人は、興^{あた}へられて愈々豊^{いよいよ}かならん。されど有^もたぬ^{ひと}人は、その有^もてる物^{もの}をも取^とられるべし」（マタイ傳 13 章 12 節）という新約聖書の言葉になぞらえたわけである。このようなマートンの業績を、弟子のズッカーマンは、ノーベル賞受賞者と 41 番目の椅子にあたる研究者とを大量に調査・比較しつつ、さらに敷衍する研究を公刊している（Zuckerman 1975）。

マートンは、このような科学社会学研究の延長線上で、さらに広範な領域での知識社会学的研究を発表している。

2 「中範囲理論」

マートンは第二に、「中範囲理論」の提唱者としてあまねく知られている。これは、1948 年のアメリカ社会学会での、マートンのパーソンズ批判に端を発している。パーソンズはこのとき、アメリカ社会学会理論部会長として、「社会学理論の位置」について報告し、一般理論研究の決

定的重要性を訴えた。われわれは多くの社会学者が共通の前提に立って作業を進めることのできるような、「一定の広い基本線について、合意しうる位置に立っている」。「個々人の関心や貢献は異なっており、広い範囲にまたがっているにもかかわらず、彼らが単一の主要な概念構造の発展に収斂するみこみは、充分にある」(Parsons 1948, pp.3-4.)。パーソンズは「統一社会科学運動」(高城 1992、第六章、参照)の可能性を確信しつつ、こう主張した。

これにたいしてパーソンズの最も早い時期の弟子であるマートンは、このようなパーソンズの危険性を指摘し、これに「中範囲の理論」を対置したのである。マートンによれば、体系的理論は思弁的なものになりがちであり、「完全な社会学体系は、それほどみばえのしない、だがはるかに適切な、限定された理論に道を譲らなければならない」。「われわれはどんな人にも、社会学的諸問題の解決のための、完全な参考書を供給するような知識体系の創造を、期待することはできない」。「科学は、社会学でさえも、そう単純なものではありえない」。

「広大な領域の正確に観察された社会的行動の細部をも包括する適切な社会学理論や、多数の調査研究者の注意を適切な経験的調査の諸問題に向けられるに充分なほど実り豊かな社会学理論の形成を、予期するかのごとく語る人がいる。私はこれは、時期尚早の黙示録的信仰であると考えてる。われわれにはその準備がない。準備作業はまだおこなわれていない。このような並外れた楽観主義者も、歴史的発展についての感覚をもつならば、こうした明らかな時期尚早の希望をいただくことはなかったであろう」。こうしてマートンは、「限定された範囲の現象に適切な諸理論を発展させること」が、こんにち最も重要な課題であると主張した (Merton 1948, pp.165-166. Merton 1949, p.6. 四頁)。

この二年後、アメリカ社会学会会長に選出されたパーソンズは、会長講演において、マートンの主張をふまえながらも、なお一般理論の重要性を主張している。パーソンズによれば、一般理論とは「スペンサー・タイプの思弁的体系」を意味するものではない。こんにちわれわれは、そうした

陥穽を避けることのできる地点にたっている。「思弁的体系のもつ本質的な難点は、未完成な閉鎖性にあり、適切な理論的明晰化と統合、操作的技術、経験的検証とを欠いている点にある」。「だがいまや、部分的に関連する形態において概念図式は存在しており、実践的目的のために共通に使用されている。そのさらなる洗練と展開とが、われわれの分野の繁栄のためには不可欠であり、それは明らかに実現可能となっている」。

一般理論はまず第一に、「観察や問題選択」に指針を与えるものであり、「隠された諸要因や説明変数を発見させる」ものとなりうる。もちろんそれにとどまるものではない。一般理論はより特殊化され、「経験的結果が測定され評価される理論的意味体系」とならなければならない。「初期段階において、これらの理論的意味の『島々』は、事実の海のなかで遠く離れているかもしれない」。「しかし、一般理論が洗練され、それに直接関連する経験的証拠が蓄積されるにつれて、島々はますます緊密に統合され、その地形はより明確に規定されるようになる」。マーソンの「中範囲理論」が重要なのは、「それが一般理論の健全な伝統への志向をもっているからである」。

少なくとも一般理論は、「社会学のさまざまな分野の研究者間のコミュニケーションを促進する、共通の言語を供給することに役立つ。それは現存する膨大な経験的知識を集約し、相互に関連づけ、利用可能とすることに奉仕しうる。それはまた、われわれの知識のギャップに注意を喚起することに、役立つ」。さまざまな中範囲理論を相互に関連づけることができるのは、一般理論においてほかにない。このようにパーソンズは、多くの中範囲理論を定式化する試みとともに、それを相互に関連づけ、より一般化する「一般理論」の重要性を強調したのである (Parsons 1950, pp.348-352)。

こののちもパーソンズは行為の一般理論や AGIL 図式に示されるような「一般理論」構築に邁進するとともに、マーソンもまた、各種の経験的諸問題について「中範囲理論」を提示していった。このパーソンズ=マーソン論争に端的に示されているように、マーソンは、師のパーソンズとは異

なった志向をもち、マートンの弟子たちも激しいパーソンズ批判を重ねていったにもかかわらず、二人は生涯変わらず友好関係をつづけ、学問的協力関係を保っていった。このことは、十分に銘記されてよいと思われる。

3 多彩な中範囲理論の提示

マートンの中範囲理論の主張は、理解しやすさと現実性 (= 実現可能性) によって、多くの研究者に支持され、人口に膾炙することになった。マートン自身、同僚のラザースフェルドらと協力しつつ、多方面にわたる経験的諸問題の研究をつづけ、多彩な中範囲理論を提示しつづけていった。そのなかでもよく知られているのは、逸脱行動の研究であり、そのなかからマートンは、逸脱行動の諸類型分析のためのパラダイムを提示している。官僚制と官僚のパーソナリティとの関連構造分析やアノミー研究も、広く注目を集めた仕事である。

またマートンは、医療社会学的研究や看護社会学研究をも生みだしている。これは、コーネル大学、ペンシルヴェニア大学、ウェスタン・リザーヴ大学の医学校で医師になるための訓練を受けている学生に面接調査するとともに、医学校の学生新聞の内容分析を加味し、医学教育の現状と学生の意識とを浮き彫りにした調査研究であり、これはのちに看護教育にも拡充されている。この研究には、パーソンズの医療社会学研究分野の弟子であるラナイ・フォックス Renée C. Fox も加わっていた。

マートンは、問題や現象をうまく発見しすくい取る「掘りだし上手」であり、それを巧みにネーミングする才能の持ち主であった。マートン自身、「掘りだし上手」の諸要因を分析している (Merton & Barber 2003)。先にふれた科学社会学における「マタイ効果」や、「自己成就的予言 self-fulfilling prophecy」と「自己破壊的予言 self-destroying prophecy」は、実に巧みな命名である。自己成就的予言とは、たとえばある銀行が倒産するかもしれないという噂によって取りつけ騒ぎとなり、ある銀行が倒産するという結果となるなど、予言そのものが現実となる事態を意味する。これに対して自己破壊的予言とは、たとえば特定の農産物が生産過剰になるという予測によって多数の農民が生産制限に乗りだし、その農産物の過剰生

産に結果するなど、予言がそれと反対の事態を生みだすことを意味する。

マートンがストウファーらの調査研究（Stouffer 1949-50）に学んで彫琢した「相対的剥奪 relative deprivation」概念は、人々が抱く不満が客観的諸条件の悪さに起因するというよりもむしろ、その人がもっている期待水準と現実との主観的・相対的な落差によるものであることを示す概念として、いまや多くの研究者によって用いられている。マートンが機能分析をより明細化して生みだした「顕在的機能 manifest function」と「潜在的機能 latent function」、「順機能 eufunction or function」と「逆機能 dysfunction」、アウトサイダーとインサイダーなども、非常に有用な概念となっている。

以上のようなマートンの多彩な学問内容については、別の機会に立ち入ることとして、本稿の目的であるマートン文書の紹介に移ろう。

四 マートン文書の「知の社会史」上の意義

マートンの未公開資料は、マートン没後六年あまりののち、コロンビア大学図書館の「稀覯本・草稿図書館 Rare Book and Manuscript Library」で公開された。これは、マートンの書簡・草稿・ノートなどの膨大な集積である。これらは、約三四〇箱に整理されて収められている。文書を積み上げると正味 44 メートル 58 センチにのぼり、パーソンズの未公開資料の 1.7 倍に達する。マートンは非常にこまめな人で、この膨大なファイルを自ら整理し、内容のインデックス・カードを手書きで遺している。にもかかわらず公開されるまで 6 年余もかかったのは、その量の膨大さゆえであろう。これらは以下の 7 シリーズに分類され、さらにいくつかに分けられている。

Series I : Administrative, 1945-2002

Series II : Correspondence, 1930-2003

Subseries II .1 : Alphabetical, 1930-2003

Subseries II .2 : Recommendations, 1936-2001

- Subseries II.3 : With Students, 1942-2001
- Series III : Course Materials, 1928-1985
 - Subseries III.1 : Courses Attended and Student Activities, 1928-1939
 - Subseries III.2 : Courses Taught at Columbia University, 1941-1985
 - Subseries III.3 : Courses Taught at Other Institutions, 1934-1947
 - Subseries III.4 : Notes and Research, 1930-1966
- Series IV : Professional Career, 1940-2001
 - Subseries IV.1 : Activities, 1940-1995
 - Subseries IV.2 : Affiliations, 1943-2001
 - Subseries IV.3 : Awards and Honors, 1959-1999
 - Subseries IV.4 : Columbia University, 1948-2001
- Series V : Reference and Research, 1935-2002
- Series VI : Studies and Project, 1935-1997
- Series VII : Writings, 1933-2002
 - Subseries VII.1 : About, 1947-2000
 - Subseries VII.2 : Articles by, 1933-2002
 - Subseries VII.3 : Books by, 1933-2002
 - Subseries VII.4 : Edits for Others, 1942-1999
 - Subseries VII.5 : Translations, Compilations, Forwards & Introductions by, 1959-1999

シリーズ I 「行政 1945-2002」は、マートンの履歴書、業績目録、彼の行政的職務に関連する資料・書簡などから構成されている。ここには、マートンと歴代の秘書との交信記録やマートンの何枚かのポートレート写真がふくまれている。

シリーズ II 「書簡 1930-2003」は、コレクションのなかで最大の分量を占める書簡の集積である。ファイルはすべて、マートンの差し出した手紙のコピー、コピー機がなかった時代のものは、薄い紙の下にカーボン紙をはさんで複数枚重ねてタイプした複写（不幸にして、偶然一番下にあった

複写がファイルされていると、にじんでほとんど判読困難なもの(がふくまれている)、これにたいする相手からの返信、これにマートンがさらに応答していればそのコピー、これに関連する草稿のコピーや新聞記事の切り抜き等の関連書類が一括して収められている。これらが、交信した相手ごとにファイルされ、相手の名前のアルファベット順に配列される。信じがたいほど膨大な手紙の量である。

シリーズⅡの下位分類「2. 推薦状」は、指導生らのために書いた推薦状であり、これらは2013年までは公開されないことになっている。「Ⅱ.3」は、学生との往復書簡であり、学生の質問等にマートンが応答した記録である。シリーズⅢは、授業の資料であり、下位分類「Ⅲ.1」は、マートンが聴講した授業の記録と学生時代の活動関連資料、「Ⅲ.2」はコロンビア大学でマートンがおこなった授業のシラバスや資料、「Ⅲ.3」は他大学に出講したときの記録、「Ⅲ.4」は講義ノートや関連した研究ノートや資料である。

シリーズⅣは、各種の学会をはじめとする専門職活動の記録である。下位区分「Ⅳ.2」は、マートンが所属した学会などの専門職団体の記録、「Ⅳ.3」は、マートンが授与された各種の賞や栄誉にかんする資料であり、「Ⅳ.4」は、コロンビア大学内の専門職としての活動資料の集積である。シリーズⅤは、調査研究と人物照会・資料照会の記録から構成されており、研究プロジェクト関連資料は、シリーズⅥにまとめられている。最後のシリーズⅦは、マートンの論文や著作の草稿・ノート・関連記録であり、下位分類「Ⅶ.4, 5」は、先にふれたマートンが尽力した多くの研究者の論文や著作の編集作業とマートンが執筆した序文に関連する資料・書簡の集積である。

これらの膨大な資料のなかで、マートンの理論形成過程やアメリカ社会学形成過程にかんする「知の社会史」という視覚からみて重要と思われるものを、若干摘出してみよう。まず第一に、シリーズⅡの膨大な書簡のなかには、ラザースフェルド、ダニエル・ベル Daniel Bell、モイニハン Daniel Patrick Moynihan、コーザー、ホロウィッツ Irving Louis Horowitz、

ホーフシュタッター Richard Hofstadter ら、ニューヨークを中心としたユダヤ系知識人との交流の記録が大量にふくまれている。

もちろん、マートンとラザースフェルドの関係のように、緊密に共同している研究者が同じ大学、同じ地域にいる場合、直接会って交流を重ねており、書簡や記録が残されていない場合が多々ありうる。遠方に離れている時期にだけ書簡が交わされていることも多い。したがって遺されている書簡だけで「知の社会史」を描きだすことには、大きな制約がある。とはいえ、多くの研究者の未公開資料とも突き合わせ、多数の人々の往復書簡をも参照するならば、ある程度このような制約を突破することができる。

これらの往復書簡は、マートンがニューヨーク・ユダヤ系知識人の中軸となり、彼らのコミュニケーション・ネットワークの結節点に立っていたことを物語っている。マートンは、アメリカ社会学界のオルガナイザーであると同時に、ユダヤ系知識人のオルガナイザーでもあった。それゆえこれらの資料をひもとくならば、マートンの理論形成過程のみならず、アメリカ社会学展開過程を具体的に解明することにつながるであろう。

第二に、マートンとパーソンズや多くのパーソニアンとの交流を跡づけるための、多くの資料が集積されている。パーソンズ学派の古い世代に属するキングスレイ・デーヴィス Kingsley Davis とバーナード・バーバー Bernard Barber は、マートンと同じコロンビア大学の同僚であり、多くの往復書簡が遺されている。デーヴィス文書やバーナード文書ともつきあわせるならば、彼らの間の知的交流を跡づけることができる。バーバーは、公的医療保険の制度化のリーダーとして活躍したマサチューセッツ州選出のエドワード・ケネディ上院議員のコンサルタントを務めており、マートンもふくめて、アメリカ医療の現実とかかわっていたことを想起するとき、この点の解明は重要である。さらにスメルサー Neil Smelser、フォックス、リレイ Jack & Mathilda Riley、ジャクソン・トビー Jackson Toby ら多くのパーソニアンとマートンとの往復書簡が累積されており、ここからパーソンズ学派の知的ネットワークを具体的に描きだすことができる。

第三に、マートンと彼の弟子たち、セルズニック、コールマン、ブラウ、

コーザー、ロッシ、グールドナー、ロングラコロンビア学派との交流も重要である。マートン＝ラザースフェルドを軸としたコロンビア学派のネットワークについては、研究史上ほとんど解明されていない。今後の研究が待たれるゆえんである。

さらに第四に、シリーズⅦ.4, 5に集積されているマートンの編集作業からは、アカデミック・オルガナイザーとしてのマートンの知的努力を、具体的に明らかにすることができる。シリーズⅡ.2が公開されたとき、ここに収蔵されている資料で補完することができれば、さらに豊富な像を描きだすことができるにちがいない。

第五に、シリーズⅡには、マートンとソローキンとの往復書簡がファイルされている。ソローキンは、ロシア革命とともにアメリカに亡命し、のちにハーヴァード大学社会学のポストとなった人物である。さらにシリーズⅦには、マートンが編集したソローキン記念論文集をめぐる書簡や資料が遺されている。これらの資料は、マートンがソローキンの晩年に至るまで交流をつづけていたことを物語っている。われわれは、パーソンズがソローキンと激しい対立関係にあったこと、マートン＝ソローキン関係との興味深い対照的な姿を確認することができる。

いまここで、マートンの理論形成過程に即して、いくつかの具体的なトピックスを摘出してみよう。シリーズⅥには、アイゼンハワー郵便調査関連資料がファイルされている。これは、1948年にアイゼンハワーに届けられた大統領選挙に出馬を要請する手紙の内容を分析するよう、アイゼンハワーから委託されて始められた調査研究である。この研究は、マートンとコロンビア大学応用社会調査研究所のスタッフとの共同で進められた。だが研究の途上で、突然アイゼンハワー側から、研究中止を求められる。この出来事は、大統領に就任する以前のアイゼンハワー元帥が、マッカーシズム時代に先行して、学問の自由を抑圧していたことを示す事件である。

このファイルには、アイゼンハワーとマートンとの会合の記録、覚え書き、往復書簡、分析結果の草稿等の資料がふくまれており、これらを追跡

調査した共同研究者の論文もファイルされている (Goldhamer 1998)。これらの資料から、研究史上マッカーシイズムと直接関連をもたなかったとされるアイゼンハワー大統領の学問の自由のたいする姿勢とマートンらのスタンスとを、具体的に明らかにすることができるであろう。

またシリーズⅥには、1950年代前半に争われた「ブラウン対トペカ教育委員会」事件関連の資料が収録されている。これは、「全米黒人地位向上協会 NAACP, National Association for the Advancement of Colored People」のクラーク Kenneth Clark 博士が黒白学校隔離問題をめぐる訴訟の勝利をめぐり、マートンに協力を依頼したことに端を発している。この事件は、1954年、連邦最高裁で黒白学校隔離は憲法違反であるとの画期的判決を引き出し、1960年代の公民権運動高揚の引き金になったものである。マートンらは NAACP のために調査・研究を推進し、この問題解決に向けて活動した。これらの資料は、黒人問題解決をめざすマートンらのスタンスを、具体的に示す重要な素材である。

さらにシリーズⅡのなかには、マートンとラザースフェルドやケンダールとが、ペンタゴンの陸軍省の研究者と共同で開発した焦点集団面接法 *focused group interview* にかんする資料が遺されている。これは、集団面接の新たな方法を生みだすために、ストウファーらの有名な調査研究 (Stouffer 1949-50) から学んで準拠集団論を導入し、集団のリーダーや有意味的な対象者を選抜し、彼らの情緒的反応や態度などの主観的経験に焦点をあてて面接調査する方法である (Merton *et al* 1956)。これらのファイルは、この新たな面接方法の考案過程を示す重要な素材である。

これらの素材に、さらにシリーズⅥにふくまれているエスニックな世論調査研究の資料を付け加えて分析することが重要である。これは、1940年代から50年代にかけておこなわれたニューヨーク郊外のマンハッタンヴィレ *Manhattanville* における面接調査であり、このコミュニティにおける職業上の目標と成功モデルとに照準を合わせたものであった。これらの検討によって、マートンらの研究とロイド・ウォーナーらの有名な「ヤンキー・シティ研究」とを比較することができるであろうし、さらに有益な

知見をうることにつながるであろう。

シリーズⅡのBox 96には、マートンとライト・ミルズ C. Wright Mills との興味深い往復書簡が一括してファイルされている。これは、ライト・ミルズが、彼のラディカリズムのゆえにマッカーシイズム期にコロンビア大学で昇任できなかったとの噂を否定するために、マートンがその証拠として、1939年から1949年までのミルズとの往復書簡をファイルし直したものである。そもそもミルズとドイツから移民してきたガース Hans H. Gerth とを引き合わせ、ウェーバー論を書くと同時にウェーバーの英訳を公刊するよう勧めたのは、マートンであった。マートンはのちにノブコ未亡人に協力して、ガースの追悼論文集をも編纂している。

以上のようにマートン文書は、多彩な内容をふくんでおり、ニューヨーク知識人、ひいてはアメリカ社会学界の展開過程を知るうえで、「知の社会史」上の宝庫であるとみることができる。これら进行分析するには多大のエネルギーを必要とするが、なんにんかでチームを組んで共同研究をおこなうことが切に期待される。筆者もこの戦列に参加することを期して、ひとまず筆を置くことにしよう。

References

- Clark, Jon *et al.* eds. 1990 *Robert K. Merton: Consensus and Controversy*, The Falmer Press.
- Cohen, I. Bernard. 1990 *Puritanism and the Rise of Modern Science: the Merton Thesis*.
- Coser, Lewis A. ed. 1975 *The Idea of Social Structure: Papers in Honor of Robert K. Merton*: Harcourt Brace Jovanovich.
- Crothers, Charles 1987 *Robert K. Merton*. Key Sociologists Series. Chichester: Ellis Horwood Limited; London: Tavistock Publications. (中野正大・金子雅彦訳『マートンの社会学』、世界思想社、1993年)
- Goldhamer, Joan 1998 General Eisenhower in academe: A clash of perspectives and a study suppressed (unpublished).

- Merton, Robert K. 1938 Science, Technology and Society in Seventeenth Century England, in George Sarton ed., *Osiris: Studies on the History and Philosophy of Science, and the History of Learning and Culture*, The St. Catherine Press, Belgium.
- 1946 *Mass Persuasion: The Social Psychology of a War Bond Drive*. (柳井道夫訳『大衆説得』)
- 1948 Discussion: The Position of Sociological Theory by Talcott Parsons, *American Sociological Review* vol.13, no.2.
- 1949 (2nd. revised ed. 1957, 3rd. enlarged ed. 1968, 8th. ed. 3 vols. 1995) *Social Theory and Social Structure*. (森東吾他訳『社会理論と社会構造』、みすず、1961年。森東吾他訳『社会理論と機能分析』、青木書店、1969年)
- 1979 *Sociology of Science: An Episodic Memoir*. (定成薫訳『科学社会学の歩み：エピソードで綴る回想録』)
- 1980 Remembering the Young Parsons, *The American Sociologist*, vol.15, no.2, May 1980.
- 1994 “A Life of Learning: Charles Homer Haskins Lecture.” ACLS Occasional Paper, No.25. New York: American Council of Learned Societies.
- & Marjorie Fiske, Patricia L. Kendall 1956 *The Forcused Interview*, The Free Press.
- & Yehuda Elkana, Arnold Thackray, Harriet Zuckerman eds. 1975 *History, Philosophy and Sociology of Science: Classics, Staple, and Precursors*, 60 vols.
- & Jerry Gaston eds. 1977 *The Sociology of Science in Europe* (部分訳、定成薫訳『マートン 科学社会学の歩み』、サイエンス社、1983年)
- & Matilda White Riley eds. 1980 *Sociological Tradition from Generation to Generations of the American Experience*.
- & Harriet A. Zuckerman eds. 1980 *Dissertations in Sociology*, 61 vols.
- & Elinor Barber 2003 *The Travels and Adventures of Serendipity*.
- Miles, Mary Wilson 1975 *The Writings of Robert K. Merton: A Bibliography*, in

Coser 1975.

中山慶子 1987 マーソンの今日的意義——パーソンズとの対比で、『現代社会学』、
24号

Needham, Elizabeth C. and Marista V. Poros eds. c.2001 Complete list of Robert K.
Merton.

Parsons, Talcott 1948 The Position of Sociological Theory, *American Sociological
Review*, vol.13, also Parsons 1949.

——— 1949 *Essays in Sociological Theory*, 1st. ed.

——— 1950 The Prospects of Sociological Theory, *American Sociological Review*.
vol.15, also Parsons 1954.

——— 1954 *Essays in Sociological Theory*, 2nd. ed.

Stouffer, Samuel A. *et al* 1949-50 *The American Soldier*, 4 vols.

Selznick, Philip 1949 *TVA and the Grass Roots*.

鈴木広 1990 マーソンの方法 (徳永恂・鈴木広『現代社会学群像』、恒星社厚生閣、
所収)

Sztompka, Piotr 1986 *Robert K. Merton: An Intellectual Profile*.

高城和義 1992 『パーソンズとアメリカ知識社会』

Tiryakian, Edward A. ed. 1991 Symposium: Robert K. Merton in Review,
Contemporary Sociology, vol.20, no.4.

Weber, Max 1919 *Wissenschaft als Beruf* (尾高邦雄訳『職業としての学問』)

Zuckerman, Harriet A. 1976 *Scientific Elite*, University of Chicago Press (金子務監
訳『科学エリート——ノーベル賞受賞者の社会学的考察』、玉川大学出版部、
1980年)

本稿は、平成 21 - 22 年度科学研究費補助金・基盤研究 C : 21530501
による研究成果の一部である。e-mail:takagi@main.teikyo-u.ac.jp

(2010年10月27日)